

アウグスティヌス

2017 年本試

問 2 神と教会についてのアウグスティヌスの考えとして最も適当なものを，次の

①～④のうちから一つ選べ。

12

- ① 教会が指導する聖書研究を通して信仰を深めることにより，神の恩寵を得ることができると考えた。
- ② 人は神の恩寵によらなければ救われないと主張し，教会は神の国と地上の国を仲介するものだと考えた。
- ③ 教会への寄進といった善行を積むことにより，神の恩寵を得ることができると考えた。
- ④ 人は神の恩寵によらなければ救われないと主張し，贖宥状の購入による救済を説いた教会の姿勢は間違っていると考えた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 2	12	②	2

問7 次の文章は、アウグスティヌスが神のもとでの憩いについて述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

17

私たちの汚れた霊は、(この世に)関心をもつ愛によって下の方へ流れ落ちていきますが、あなた(神)の聖なる霊は、確かな愛によって私たちを上の方に引き上げてくれます。……あなたの賜物たまもの(である聖なる霊)のなかで私たちは憩います。そこで私たちはあなたを楽しみます。私たちの憩いは私たちの場所です。愛が私たちをその場所へ引き上げてくれます。……物体は自らの重さによって自分の場所に向かおうとします。……火は上に、石は下に向かおうとします。それらは自分の重さによって動かされ、自分の場所を求めます。……私の重さは私の愛です。私はそれによって動かされ、それが動かすところへ運ばれます。私たちはあなたの賜物によって点火され、上に運ばれます。(点火された)私は燃え、上に上昇します。

(『告白』より)

- ① 人間は、自分自身の重さをもっており、その重さによって上にも下にも向かう。神の賜物により火を点けられて燃え上がると、人間は、愛によって上に引き上げられ、神の賜物のなかで憩うことになる。
- ② 人間は、火や石のように、自分自身の重さをもっており、向かうべき方向は最初から決まっている。そのため、どんな人間でも、下に落ちることなく、愛によって神へ運ばれて、憩うことになる。
- ③ 物体は、自分の重さをもっており、おのおの向かう方向が決まっている。だが、人間は、自分自身の愛の力によって自らを上を運び、私たちの場所である神の賜物のなかで憩うことになる。
- ④ 物体は、自分の重さをもっており、すべて下へ向かう。同様に人間も、自らの重さによって下へと落ちながらも、自分の場所に憩うことで、神へ向かう愛を得て、上に引き上げられることになる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第2問	問7	17	①	3

2016 年追試

問 5 次のア～ウは，キリスト教において説かれた，信仰をめぐる様々な思想についての説明であるが，それぞれ誰のものか。その組合せとして正しいものを，下の①～⑧のうちから一つ選べ。 15

ア 厳格な律法主義では罪の自覚しか生じないと考え，人が義とされるのは律法の行いではなく信仰によると主張した。

イ 誰が救われるかは神の意志によって予定されているのであり，信仰をもつことそのものが神の与える恩寵であると主張した。

ウ 理性により得られる真理と信仰により得られる真理は，調和するのではなく区別されるべきであるとして，哲学と神学の分離を主張した。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-------------|---|------------|
| ① | ア | ヨハネ | イ | マルクス・アウレリウス | ウ | トマス・アキナス |
| ② | ア | ヨハネ | イ | マルクス・アウレリウス | ウ | ウィリアム・オッカム |
| ③ | ア | ヨハネ | イ | アウグスティヌス | ウ | トマス・アキナス |
| ④ | ア | ヨハネ | イ | アウグスティヌス | ウ | ウィリアム・オッカム |
| ⑤ | ア | パウロ | イ | マルクス・アウレリウス | ウ | トマス・アキナス |
| ⑥ | ア | パウロ | イ | マルクス・アウレリウス | ウ | ウィリアム・オッカム |
| ⑦ | ア | パウロ | イ | アウグスティヌス | ウ | トマス・アキナス |
| ⑧ | ア | パウロ | イ | アウグスティヌス | ウ | ウィリアム・オッカム |

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 5	15	⑧	3

2015 年本試

問 4 次の文章は、言葉を通じて神を求めたキリスト教の伝統について述べたものである。□ a □～□ c □に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。 □ 14 □

祭祀や儀礼を通じて神と交わろうとする自然的宗教に対して、キリスト教では、神は人間に言葉で語るというユダヤ教の考え方が継承され、言葉を通じての関わりが重視された。例えば、「出エジプト記」で神が預言者に与えたとされる□ a □は、言葉で表されたものであった。さらに、「ヨハネによる福音書」の冒頭には「初めに言葉(ロゴス)があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった」と記されている。

その一方で、聖書の言葉は多様な解釈にさらされ、異教徒から攻撃されたり、異端者を生んだりすることになった。彼らと論争し、キリスト教の教義を確立するうえで大きく寄与したのは、□ b □である。その自伝的著書『告白』には、「取れ、読め」という子どもの声をきっかけに、「主イエス・キリストを身にまといなさい」という聖書の一節を読んで回心したと記されている。彼にとって、聖書の言葉を解釈することは神を理解する試みであり、罪深き自己を告白することは罪からの救いを可能とする□ c □を語ることであった。

- | | | | | | | |
|---|---|-----------|---|----------|---|-------|
| ① | a | 山上の説教(垂訓) | b | アウグスティヌス | c | 理法の展開 |
| ② | a | 山上の説教(垂訓) | b | アウグスティヌス | c | 神の恩寵 |
| ③ | a | 山上の説教(垂訓) | b | パウロ | c | 理法の展開 |
| ④ | a | 山上の説教(垂訓) | b | パウロ | c | 神の恩寵 |
| ⑤ | a | 十戒 | b | アウグスティヌス | c | 理法の展開 |
| ⑥ | a | 十戒 | b | アウグスティヌス | c | 神の恩寵 |
| ⑦ | a | 十戒 | b | パウロ | c | 理法の展開 |
| ⑧ | a | 十戒 | b | パウロ | c | 神の恩寵 |

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第2問	問4	14	⑥	3

2014 年本試

問 6 次のア～ウは，キリスト教における，人間の欲望についての考え方である。
その正誤の組合せとして正しいものを，下の①～⑧のうちから一つ選べ。

16

ア パウロは，分かっているが欲望のために悪を行ってしまう人間のあり方に悩み，そこからの救済は福音への信仰によるほかにないと考えた。

イ アウグスティヌスは，生まれつき人間にそなわっている自由意志により，欲望から悪を犯してしまう傾向を克服できると考えた。

ウ イエスは，欲望を抱いて女を見る者は，心のなかで既に^{かんいん}姦淫をしていると述べ，情欲を克服した善き人だけが，他者を裁くことができると主張した。

- | | | | |
|---|-----|-----|-----|
| ① | ア 正 | イ 正 | ウ 正 |
| ② | ア 正 | イ 正 | ウ 誤 |
| ③ | ア 正 | イ 誤 | ウ 正 |
| ④ | ア 正 | イ 誤 | ウ 誤 |
| ⑤ | ア 誤 | イ 正 | ウ 正 |
| ⑥ | ア 誤 | イ 正 | ウ 誤 |
| ⑦ | ア 誤 | イ 誤 | ウ 正 |
| ⑧ | ア 誤 | イ 誤 | ウ 誤 |

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 6	16	④	3

2014 年追試

問 8 次のア～ウは様々な思想や宗教における，知の位置づけについての説明である。その正誤の組合せとして正しいものを，下の①～⑧のうちから一つ選べ。

18

ア アウグスティヌスは，哲学を「神学の侍女」と位置づけ，信仰の追求には不要であると述べている。

イ 孟子は，自分や他人の正しくない点を恥じて憎む心を養い育てていくことで，四徳の一つである智を実現できると主張している。

ウ 大乘仏教において，六波羅蜜という六つの実践徳目の一つに位置づけられている「智慧」は，迷いを離れ真実を悟る働きのことである。

- ① ア 正 イ 正 ウ 正
- ② ア 正 イ 正 ウ 誤
- ③ ア 正 イ 誤 ウ 正
- ④ ア 正 イ 誤 ウ 誤
- ⑤ ア 誤 イ 正 ウ 正
- ⑥ ア 誤 イ 正 ウ 誤
- ⑦ ア 誤 イ 誤 ウ 正
- ⑧ ア 誤 イ 誤 ウ 誤

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 8	18	⑦	3

2013 年本試

問 5 次の文章は、アウグスティヌスが自らの母の死という個人的な体験を通して、憐れみの心について記述したものである。アウグスティヌスの思想を踏まえて、この文章の説明として最も適切なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

16

私は、(死んだ母のために重い悲しみに沈んでいましたが、涙をもって安らぎを得たことで心の傷もすっかり癒され)今までとはまったく違った涙をそそぐのです。それは、(母も含めて)アダムにおいて死んだすべての魂の罪の危険を考えて、深く動かされて霊から湧き出る涙です。……主よ、赦してください。母の裁きに関わらないように、お願いします。憐れみが裁きに勝りますように。実際、あなたの言葉は真実です。あなたは憐れみ深いものに憐れみを約束しています。人々が憐れみ深いのは、あなたが彼らに憐れみ深いからです。

(『告白』より)

- ① ここで彼は、自らの母の死を通して神の言葉を人々に伝えるために、一部の悪しき人々が生まれながらに罪を抱えていると警告する一方で、罪の赦しに基づく新しい約束を説くことによって、希望と勇気を与えようとしている。
- ② ここで彼は、自らの母の死そのものよりも、原罪のゆえに母が犯した罪が神によって裁かれることを深く嘆く一方で、そのような神の裁きが、憐れみには憐れみを、罪には罰を、という報復主義に基づくものだと説いている。
- ③ ここで彼は、自らの母の死そのものよりも、むしろ原罪によって母が犯した罪が贖い得ないものであることを深く悲しむ一方で、そのような罪さえも神からの憐れみという恩寵によって裁きを免れ得ると信じている。
- ④ ここで彼は、自らの母の死を悲しみ、彼女の犯した罪を嘆く一方で、そのような罪の裁きに勝る憐れみ深い神の恩寵のおかげで、他の人々もまた母に憐れみを与え、人々が母の魂の罪を赦すようになると示唆している。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 4	16	③	3

2012 年本試

問 8 悪をなす自己を見つめ直した思想家について述べた次の文章を読み，文中の空欄 **a** ・ **b** に入る語句の組合せとして正しいものを，下の①～⑥のうちから一つ選べ。 **11**

4～5世紀に活躍した **a** は，青年期は欲望のままに生きていたが，神への信仰に目覚め，悪に苦悩しながら，自らを見つめ直していった。彼は，その遍歴を，著作『 **b** 』に記した。

- ① a トマス・アクィナス b 自省録
- ② a アウグスティヌス b 告白
- ③ a マルクス・アウレリウス b 自省録
- ④ a アウグスティヌス b 神学大全
- ⑤ a マルクス・アウレリウス b 告白
- ⑥ a トマス・アクィナス b 神学大全

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第2問	問8	11	②	2

2011 年追試

問 6 教父の一人であるアウグスティヌスは、『神の国』において、キケロの議論を次のように批判している。その趣旨に合致する記述として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

10

キケロは宗教心を、何か我々の意志によるものがあるか、それとも(神による)未来の予知があるか、両者のいずれか一つを選ばなければならないという窮地に陥れた。……彼はこれら両者から、自由意志を選びとった。それを成立させるために、彼は未来の予知を否定したが、このように人間を自由な者にしようと望んで、かえって神を冒瀆する者にしたのである。……我々は、このような神を冒瀆する不敬虔な企てに反対して、神は万事が生じる以前にそれを知ると主張するとともに、他ならぬ我々の意志によって生じると感じかつ知っていることは何であれ、それを我々が行うのは我々自身の意志によると主張する。

- ① キケロは、人間の自由を肯定して、万事を予知することは神にも許されていないと主張した。そのような考え方を不敬虔であると批判したアウグスティヌスは、神は万事を予知すると説き、人間の自由を否定した。
- ② キケロは、人間の自由を肯定して、万事を予知することは人間のみに許されていると主張した。そのような考え方を不敬虔であると批判したアウグスティヌスは、神も万事を予知できると説きつつ、人間の自由を肯定した。
- ③ キケロは、人間の自由を肯定して、万事を予知することは人間にも可能であると主張した。そのような考え方を不敬虔であると批判したアウグスティヌスは、人間の自由を認めつつも、万事を予知するのは神のみと説いた。
- ④ キケロは、人間の自由を肯定して、万事を予知することは神にも不可能であると主張した。そのような考え方を不敬虔であると批判したアウグスティヌスは、人間の自由を認めつつも、神は万事を予知すると説いた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 6	10	④	3

2008 年本試

問 5 アウグスティヌスが説いた，神と人間との^{かか}関わりについての記述として最も
適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 9

- ① 我々は自らの原罪を克服しようと努めるべきであり，その努力に応じた神の恩寵によってのみ救済される。
- ② 我々は神の無償の愛によってのみ救済されるのであり，原罪のゆえに自ら善をなす自由を欠いている。
- ③ 我々は神のロゴスにより創造されているため，そのロゴスに従うよう努めることによってのみ救済される。
- ④ 我々は神の律法を遵守することによってのみ救済されるが，その律法を破ったならば神の罰を受ける。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 5	9	②	3

2005 年追試

問 3 原罪に関するアウグスティヌスの考えを説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

3

- ① すべての人間は、原初の人間のふるまいに起因する不道德な欲望、つまり原罪を負っている。それゆえ人間は、理性の指導に従い神の存在を論証していく過程を通して、この欲望から解放されていき、やがて救済される。
- ② 人間は、天地の初めから、生まれつき自己中心的な性質を神に負わされている。その性質こそが原罪である。人間は自らの自由意志によって神への信仰を選び取り、それを通して神の恩恵を獲得しなければならない。
- ③ この世は善と悪という対立し合う二つの原理から成り立っており、すべての人間は悪の原理、つまり原罪に支配されている。人間は、神に従順であったころの原初状態へと復帰し、そこに全面的に没入することで救済される。
- ④ 原初の間が自由意志を悪用して神に背いたため、すべての人間は生まれつき原罪を負っている。それゆえ人間は自由意志によってではなく、神からの一方的な恩恵によってのみ救済され、善に向かうことができるようになる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 3	3	④	3